

日本民家園だより

特集「民家とエコロジー」 vol.70

環境にやさしい昔の暮らし

「民家とエコロジー」 —環境にやさしい昔の暮らし—

■はじめに

日本民家園では平成15年度より、企画展示に合わせて古民家の聞き取り調査を行っています。園内25棟のうちこれまで12棟について実施し、ご家族や関係者、計63名の方々から当時の生活等についてお話をうかがってきました。この調査の報告は、『日本民家園収蔵品目録』（1～11既刊）に収められています。

ここではこれまでの聞き取りの中から、「使わない」「捨てない」「あるもので済ます」という3つの言葉をキーワードに、環境にやさしい昔の暮らしぶりを紹介していくことにしましょう。

■使わない —節約—

昔と今の家財道具を比べたとき、もっとも大きな違いは何でしょうか。それは電化製品の有無です。電気が無いのですから節約以前の問題ではありますが、では無い中でどのような工夫をしていたのか、省エネのヒントにまずそこから見ていくことにしましょう。

□寒さと暑さ

寒さ対策の要点は下からの冷えを防ぐことです。しかしながら昔の家は板敷きの部屋が多く、畳が入っていたのはごく一部でした。しかも、その畳も敷くのは客のあるときだけという家も多かったのです。では、板敷きの部屋はどうしていたのでしょうか。山形の豪雪地帯にあった菅原家では、床にはムシロを敷いていました。特に寝部屋には「ネゴ」と呼ばれる分厚いムシロを敷き、その下にさらにワラを敷き詰めていました。

では寝るときはどうしていたのでしょうか。今は電気毛布もありますが、昔は湯たんぽと炭を利用した行火ぐらいしかありません。それらも使うのはお年寄りだけという家が多かったようです。保温性を高めるため、マットレス代わりに使われたのはワラ布団でした。ワラの柔らかいところをつめたものです。しかし、寝るときは囲炉裏の火も消しますので家の中は寒く、屋根の煙出しからは雪が吹き込むこともありました。長野県の佐々木家では、布団の口まわりが息で凍るほど寒かったので、寝るときは頬かむりをしたといいます。

一方、暑さの方はどうしていたでしょう。『徒然草』に「家の作りやうは、夏をむねとすべし。」とあるように、日本の民家の多くは軒が深く、風通しよく作られていました。登戸の清宮家では、夏のあいだ畳を上げゴザを敷いていましたが、その程度でしのいでいたのです。

□水

電気とともに節約を叫ばれるのが水ですので、ここではもう1つ、水の話をすることにしましょう。

井戸のあった家。川から汲んでいた家。清水を引いていた家。水道の普及以前は土地の環境に応じて水を確保していました。湧水や谷川から引く家では24時間流しっぱなしでしたが、それでも水が大事にされたことに変わりありません。菅原家には家の両脇に池がありました。山側の池に清水が流れ込み、ここから引いた水を台所で使ったあと、下の池に落としていました。では、となりの家はどこから水を引いていたでしょう。実は菅原家が排水を落とした池から引いていたのです。こうして何軒かの家が順番に水を使い、さらにその下に洗い場が設けられていて、洗濯などを行っていました。不衛生なようですが、水は常に勢いよく流れていたため、十分きれいだったそうです。さらにこの池には水の浄化のため鯉が飼われており、貴重なタンパク源にもなっていました。浄化に鯉を使うのは他にも例があり、清宮家では井戸の中に鯉を飼っていました。

■捨てない —リサイクル—

昔の民家ではさまざまなものが使いまわされました。現代に比べると、そのリサイクル率は桁違いに大きかったはずですが、現金収入の少ない時代は、まず物そのものが貴重でした。それに加えもう1つ大きな理由として、特に農家では生活と生産が一体となっていたことがあります。生産の中で不要になったものが生活にまわされ、生活の中で不要になったものが生産にまわされる、そうしたサイクルが出来上がっていたのです。わかりやすい例としてワラを取り上げてみましょう。ワラは米の生産過程で生じる不要物です。しかしこれが、ゾウリなどの履物やミノなどの雨具、布団の中身、屋根の葺き替えに用いられる縄、などとさまざまに姿を変え、生活の中で活用されます。そして生活の中で出る大小便や風呂の排水、囲炉裏の灰、しょう油の絞りかすなどが、田畑の肥料として再び生産の中へ戻されていくわけです。

□衣

衣食住のうち、昔と今とで最も価値が変わったのは「衣」の部分かもしれません。すべて自家製であり、しかも作るには大変な手間がかかったからです。

佐々木家から寄贈されたコタツの上掛けは、横糸の代わりに細く裂いた布が使われています。これは裂き織と呼ばれるものです。菅原家から寄贈されたワラ製のバンドリ（荷を負うときの背あて）には、肩掛け部分に布を編みこんだものがあります。こうした布はすべてリサイクルです。布地は古くても保

管され、大人の着物をほどいて子どもの服を縫うようなことは、どの家でも日常的に行われていました。布はもちろん糸そのものも貴重であり、山梨の広瀬家では糸くずや使い残しの糸まで取っておいたそうです。

民家園の中には養蚕をやっていた家が少なくありません。しかし、養蚕農家であっても家で使うのはクズマユという出荷できないものだけでした。糸をとって絹織物にされたほか、薄くのばして真綿にし、ドテラやチョッキの中身としても使われました。なお、糸取りのあとに残る蚕のサナギも、そのまま捨てることはしません。菅原家や佐々木家では食糧として鯉を飼っていましたが、その良いエサになったそうです。また、飼育途中で出る蚕のフンや食べかすも、捨てずにすべて肥料にしていました。

麻を栽培していた家も少なくありません。麻の布は、簡単に言えば草の繊維を織ったものです。繊維をとるため皮を剥いた残りをオガラといいます。これも捨てることはありません。焚き付けにされたほか、屋根材にされたり、湿気を取るためにタンスの引き出しに敷かれたりしました。一方、剥いた表皮から繊維をとったあともオクソというカスが出ます。菅原家ではこちらを捨てることはせず、ヨシズの上で和紙のように固めました。これが掛け布団の中身となったのです。

■あるもので済ます ー地産地消ー

エコロジーの主張の中でしばしば「地産地消」という言葉が聞かれます。土地のものをその土地で使えば、運搬にかかるエネルギーが削減できるという考え方です。流通が未発達だったこともあります。昔の民家の暮らし方は地産地消そのものでした。

□食材

民家園にある家は農家を中心です。農家はもちろん、その他の家も田畑を持ち、基本的な食材は自家製でした。ほかの食材もほとんど近隣地域のものといっいでしょう。これは、買う側の現金収入が限られていたこと、売る側が未発達で日常的に利用できるのは行商程度しかなかったことによります。

自家製だったということは、食事が土地の風土に大きく左右されたということです。山梨県甲州市の広瀬家では、朝はトウモロコシの粉から作るオネリ、夜は小麦粉で作るホウトウでした。この家は山の斜面にあり、田を作るのがむずかしかったのです。

魚や肉は特別のときに食べるご馳走でした。それも魚なら鯉、肉ならニワトリやウサギという家が多かったようです。いずれも家で飼育できたものです。肉は貴重だったため、食べた後の骨も無駄にはせず、石の上でたたいてつぶし、肉団子の材料にしていました。

□建材

最後に家そのものについて見ていきましょう。

木材は基本的に自分の山や共有林から伐り出しました。広瀬家では倒した木をドングルマという木製の車輪の上に載せ、山から曳き下ろしてきました。岩手の工藤家では台風による山の倒木を利用して、納屋の2階と庇部分、それから倉を作ったそうです。

民家園では現在、屋根の葺き替えに使う茅は富士山の裾野から運んでいます。しかしかつて、茅場は必ず地元がありました。民家園に近い登戸の清宮家でも、向ヶ丘遊園あたりに茅場がありました。茅が足りなければ篠竹なども使いました。小麦のワラを貯めて葺き替えに使ったという話もいろいろな家で耳にします。変わったところでは、広瀬家では飢饉のときの食材として、シライモの茎を屋根の一番下に葺き込んだそうです。この広瀬家は山間部にあり、土蔵の屋根には白樺の皮を使っていました。雨のときは澄んだ水が落ちるため、この水も手桶に集めて使ったそうです。木の屋根ということでは、長野から移築した三澤家の板葺き屋根があります。この板は主に水に強い栗の木を割ったもので、山間部ならではのものといえるでしょう。

壁に使う土も地元のもので。工藤家のそばには川岸に粘土質の赤土の出るところがあり、その土を使って修理なども家族で行っていました。壁の下地の小舞には通常竹が使われますが、岩手には竹が少ないため、葦や細い木が使われていました。昔の民家はまさに、地産地消の産物だったのです。

■おわりに

民家園の家のほとんどは、家の建て替えをきっかけに移築されています。そして建て替えの理由には、「寒い」「住みにくい」ということが少なからずあったようです。冬、民家園を訪れば、その寒さが実感できるでしょう。床上公開している棟に上がれば、畳の冷たさに驚かれることと思います。また、バリアフリーという考え方などない時代ですから、そうした面での使いづらさも実感できるかもしれません。

エコロジー対策がどんなに叫ばれようと、昔の暮らしに戻ることはできません。しかし、消費がすべてという現在の在り方を見直すことは、今からでも十分できるはず。なぜなら、そうした暮らし方はわたしたちが元から身に付けていたものではなく、その土地の自然環境を生かし、物を大切にしていた時代の方がはるかに長いからです。

(渋谷卓男)

これまでの企画展示



旧船越の舞台



旧作田家住宅



蚕影山祠堂



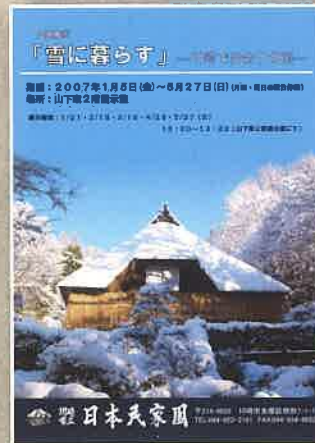
旧三澤家住宅



旧清宮家住宅



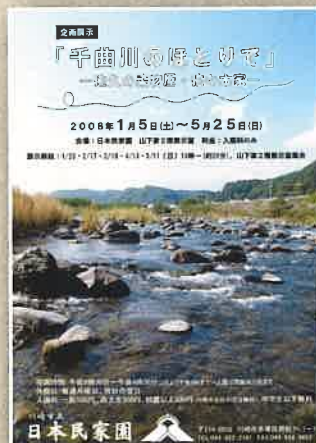
旧広瀬家住宅



旧菅原家住宅



旧伊藤家住宅



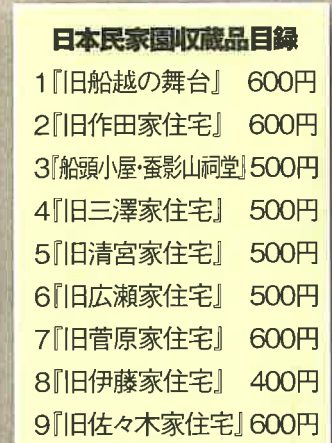
旧佐々木家住宅



旧原家住宅



旧工藤家住宅



日本民家園収蔵品目録

- 1『旧船越の舞台』 600円
- 2『旧作田家住宅』 600円
- 3『船頭小屋・蚕影山祠堂』 500円
- 4『旧三澤家住宅』 500円
- 5『旧清宮家住宅』 500円
- 6『旧広瀬家住宅』 500円
- 7『旧菅原家住宅』 600円
- 8『旧伊藤家住宅』 400円
- 9『旧佐々木家住宅』 600円
- 10『旧原家住宅』 500円
- 11『旧工藤家住宅』 500円

日本民家園だより vol.70 発行：平成21年3月20日

川崎市立日本民家園 URL <http://www.city.kawasaki.jp/88/88minka/home/minka.htm>
 〒214-0032 川崎市多摩区枳形7-1-1 TEL 044(922)2181 FAX 044(934)8652 交通:小田急線「向ヶ丘遊園」駅南口下車徒歩13分
 開園時間 [11～2月]午前9時30分～午後4時30分 [3～10月]午前9時30分～午後5時 入園は閉園30分前まで
 休園日 毎週月曜(祝日の場合は開園)、祝日の翌日(土・日曜の場合は開園)、12月28日～1月3日
 入園料 一般500円、高校・大学生300円、65歳以上300円(川崎市在住の方無料)、中学生以下無料